

「開発の人類学」は開発実務者の「役に立たない」のか？

真崎克彦 (清泉女子大学 地球市民学科)

開発の認識論的な基盤を根本から問う「開発の人類学」は、開発運営に資する情報提供に主眼を置いた「開発人類学」と区別されてきた。しかも、それはより良い開発のあり方というより、開発に代わるオルタナティブを探求するので、開発実務者に忌避されがちであったと一般的に見られている。

開発実務者が「開発の人類学」を非とすることが多いのは間違いないだろう。しかし、だからと言って、「開発の人類学」が指摘するような開発主義の陥穽について、開発実務者は考えたことがないわけではないし、それが全く気にならないわけでもない。現地駐在員であればなおのこと、地元住民と日々接する中で、開発につきまとう権力性に疑問を感じることは少なくない。それどころか、時間や予算をたっぷり使えるのであれば、その課題にとことん向き合ってみたいという思いを密かに抱いている人もいるし、実際の仕事の中で開発言説に巻き込まれることに躊躇し、それに行為遂行的に応じる人も実在する。

何ゆえに、開発実務者は開発の権力性を表立って取り上げること避けがちなのか。この点を考える上で「不快からの心理的逃走」というフロイトの概念は示唆的である。結婚式の日を自分の大学の研究室で過ごしてしまい、一生独身で過ごすことになったある化学者の例をあげて、フロイトは、その人物の心の奥底に結婚したくないという気持ちがあったと分析する。単にもの忘れが起きたのではなく、結婚を望まないことを自分で認めたくなかったのだ、その感情すら思い出さないようにしたというわけである。

同じように、開発実務者が公の場で開発主義を問い直すことを二の次にしがちなのも、そのチャレンジに背を向けてはいけないという気持ちがあっても、それに手をつけると事が大きくなるので無意識に忘れようとしてしまうからではないのか(真崎 2010)。しかも、先の化学者と同じく、現実回避をしていることを認めたくはないので、いつの間にかその難題の存在すら思い出さないようにしてしまう。

ならばこそ、「開発の人類学」は開発実務者の心中にある「良心の声」に働きかけるという大切な役割を果たし得るのではないのか。開発の現状に対する批判的な問いかけによって、開発実務者がそれまで無意識に打ち消そうとしてきた問題対処欲が呼び起こされる可能性は否定できないのである。

近年、開発が地球社会の大きな秩序の中で無化されるケースがますます目立っている。その端的な例がアフガニスタンやイラクでの復興支援である。武力侵攻や占領統治の尻拭いを急ぎたい米国やその友好諸国の意向が大きく影を落とす中、開発実務者は生活改善協力に地道に取り組むこともままならず、逆に「復興成果」を取り繕うことを余儀なくされがちである。そうした中、開発実務者の間では、開発がグローバル・ガバナンスの下請けに堕しかねない危険性に対する懸念が高まりつつある。

こうした現況を踏まえずに、開発実務者は相変わらず「開発の人類学」を忌避している、という風に一枚岩的に規定してしまうと、一方的な他者理解を生みかねない。文化人類学の持つ対抗学問としての力(=開発の脱構築/再構築の指針を示す力)は、開発言説に行為遂行的に応えることもある実務者にむしろ「役立つ」場合があるのではないのか。開発のあり方を明快に提示してこそ人類学者は開発実務者の「役に立つ」と考える人もいるが、代替案を出さなければ「役に立たない」とは言い切れない。

本発表では、報告者が関わったある国での水力発電事業の事例を取り上げる。この事業の担当者は所属先の国際協力組織が定めた住民協議の実施方針に賛同できないでいたが、それに従わないわけにもいかず、行為遂行的に仕事を進めていた。その過程では、アドバイザー(=報告者、現地の状況把握のために雇われていた)による認識論的な問いかけが「役立った」とのことである。「進んだ・豊かな」人びとと「遅れた・貧しい」人びとという二項対立を暗黙の前提として、「遅れた・貧しい状況を自分たちが救う」という名分の下、国際協力組織の主導で住民協議を進めて良いのか、という問題提起であった。

たしかに、開発実務者が民族誌や論文を読み解こうとしても、そのための労力や時間を割くのは現実的には難しいのかもしれない。しかし、だからと言って、開発のあり方を認識論的に問う「開発の人類学」のエッセンスが開発実務者に「役に立たない」わけでは決していない。

【参考文献】

真崎克彦, 2010, 『支援・発想転換・NGO - 国際協力の「裏舞台」からの発想転換』 新評論.

【 開発の人類学、開発人類学、応用・実践人類学、開発言説、グローバル・ガバナンス 】